



江筋と水道

人々に古くから食されてきたお米、そのお米を作るのに欠かせないのが「水」です。
 今回は、その「水」を河川から引き込み、遠く離れた水田に届ける役目をしている水路をご紹介します。
 いわき地方では、この水路を古くから「江筋(えすじ)」と呼んできました。
 皆さんは、市内北部にある平浄水場と上野原浄水場にどうやって河川の水が届くのかをご存知ですか？
 実は、この江筋を通して浄水場まで水が届いているのです。
 現在、江筋は水田のためだけではなく水道と工業用水道にとっても大変重要な施設であり、欠かせないものとなっています。

小川江筋（水源▶夏井川）

江戸時代初期に磐城平藩の郡奉行をしていた澤村勘兵衛の尽力により、寛文5年(1665年)に完成した水路です。
 全長は、小川町関場にある取水口から四倉町に至るまでの約30キロメートルにおよび、主に夏井川の左岸側の水田を潤しています。
 水路によって運ばれてきた水は、平浄水場の北側(平下平窪寺前)の取水口から浄水場へ取り込んでいます。



取水口(小川町関場)

愛谷江筋（水源▶夏井川）

小川江筋完成後、澤村勘兵衛の意志を受け継いだ三森治右衛門が延宝7年(1679年)に完成させた水路です。
 全長は、赤井字大作場の取水口から平下高久に至るまでの約18キロメートルにおよび、主に夏井川の右岸側の水田を潤しています。
 愛谷頭首工の貯水機能により、その上流に位置する平浄水場のもうひとつの取水口である下平窪取水場のほか、好間工業用水道の赤井取水場でも常に安定した水量を取水することができます。



愛谷頭首工(赤井字大作場)

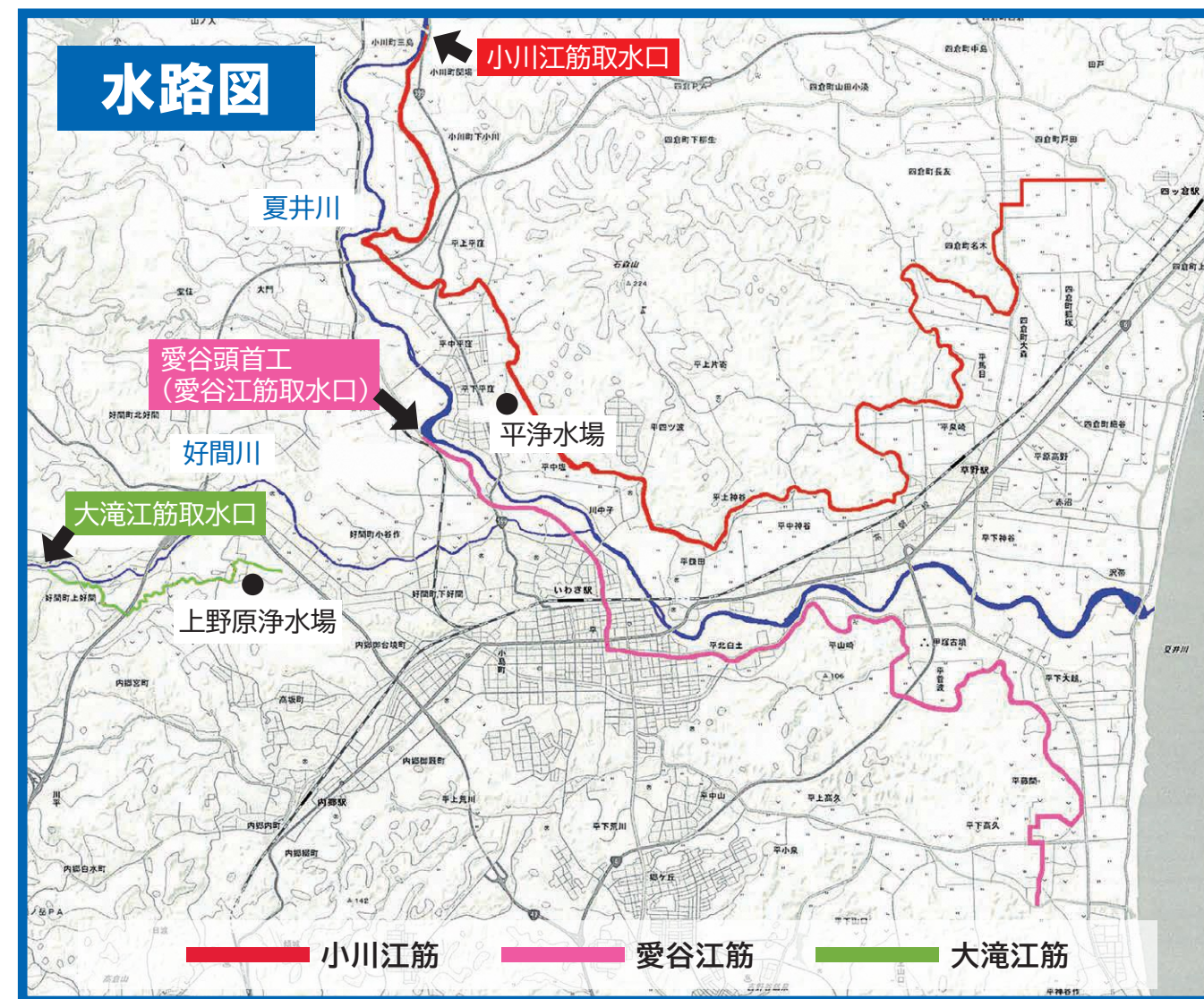
大滝江筋（水源▶好間川）

応永14年(1407年)、岩城氏が太館(好間町下好間字太館)に城を築き始めたのを機に、城内用水として開削された水路であり、市内において飲料を目的とした水路は初めてのものになります。
 廃城後は、江戸時代の延宝年間(1673年～81年)に、上野原(好間町上好間字上野原)の水田開発のために利用されました。
 好間川の右岸に設置された取水口(好間町上好間字東唐松)から延びる水路は、約5キロメートルにおよびます。途中、導水管により分岐して上野原浄水場へ水を取り込んでいます。



取水口(上好間字東唐松)

このほか、水道の水源としては、江筋と同様に農業用水から分水している鮫川堰土地改良区と四時川沿岸土地改良区の用水路がありますが、これらは次回に紹介します。



出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp>)
 ・国土地理院地図データをもとにいわき市水道局が作成

ごみや生活排水の混入防止にご協力ください

江筋は、地域の土地改良区や水利組合の皆さんによって昼夜を問わず維持管理されている施設です。
 そのおかげで、常に水道水を安定してつくることができます。
 江筋を汚さないよう、ご理解とご協力をお願いいたします。



実際に江筋内へ投棄されたごみ

お問い合わせ 浄水課 庶務係 TEL 22-9319